

松下幸之助「仕事に役立つ」話

大下英治 著

今、なぜ「松下幸之助」なのか？著者が冒頭に述べている。

それは、今の日本に元気がないのは、少子高齢化といった構造的な問題だけでなく、今の日本人が高度経済成長期の「強靱な精神力」を失っているのではないか。そして、その「強靱な精神力」は、経営の神様「松下幸之助」の仕事人生にこそ、凝縮されているように感じた。

松下幸之助は、9歳の時丁稚奉公をはじめ、電球のソケットを作る小さな町工場を興し、世界屈指の電機メーカー「松下電器」を作り上げた。その経営には、一貫して「人を活かす」という理念があった。

本書では、松下幸之助の生涯を追い、「経営の神様」を浮き彫りにすることで、今を生きるビジネスパーソンが活力を取り戻すヒントを与えてくれるような内容になっている。

本書の冒頭に成功の法則が33項目書かれており、本文中には、その「成功の法則」を柱に内容がまとめられている。又、著者が内容を強調したいところはゴシックにし、わかりやすく書かれており、タイトル通り「仕事に役立つ」ビジネス実用書になっている。

第1章「1年後の自分」を確実に成功させる話 何事も思い詰めてしまつては身動きが取れなくなる。「これしかない」と信念を貫ければいいが、貫けない場合がある。その時には、いつでも転向できるように心に幅を持つことが必要だと「ダム式経営法」を説いている。貧しい家に生まれ、学歴もなく、身体の弱かった幸之助は、「自分の持っている能力のほかに何かがある」と考え、それが運だと思い、運が味方する働き方を実践した。

第2章 不況に勝つ・自分に勝つ「強い心」

をモノにする話 小僧時代に学校へ行けなかった反面、体験を通して「生きた学問」を積むことができた。幸之助は、物事は自分一人だけの力ではできないことを自覚していた。したがって、他人に任せることを学び、それが人を育て、事業を伸ばすことにつながったと確信していた。

第3章 自分も相手も儲かる「創意工夫」ができる話 松下電器の運命を賭した方法とは「売る」のではなく「使ってもらう」という発想である。この考えによって、砲弾型電池式自転車ランプは爆発的に売行きを伸ばし、ランプ界に革命を起こした。その後もナショナルランプの見本品を惜しげもなく提供し、「自分のリスク」と「相手のリスク」を説明することで大きな信用を勝ち取った。幸之助は、生産者の使命を達成するために250年という壮大な達成期間を定めた。その中で、建設時代、活動時代とともに「社会に貢献する時代」を強調した。本当に日本をよくするためには、目先の繁栄や私欲のためではない経営をやるべきだと考えていた。

第4章 人・物・金「運が自然と味方する」話 「松下電器の経営精神について」と題する冊子では、「共存共栄」「メーカーの使命」「従業員の指導・訓育」など自らの所信を率直に述べている。特に、自然も人間も、共存共栄が本来の姿であると考えていた。

第5章 仕事で「人生の幸福」を十二分に味わう話 90歳になった幸之助が「これまでも、一生懸命やってきたつもりだが、もっともっと人生や社会の勉強をしないとだめだ。世の中の役に立つような仕事をしていきたい。やらなければならない仕事はたくさんある」と述べている。これがまさに、これからの日本に活力を与える「強靱な精神力」ではないかと感じた。

(三笠書房, 316頁, 590円) (長田利彦)